

水土里レポート 投稿様式

投稿月日	平成30年11月26日
タイトル	第1回ひろしま農業農村整備の集いin世羅へ参加しました！
水土里レポーター名	水土里ネット福山 佐々田 愛

平成30年11月3日、広島県世羅郡世羅町のせら文化センターにおいて「第1回ひろしま農業農村整備の集いin世羅」が開催され、水土里ネット福山から役員研修として役員、職員20名が参加しました。

広島県内で農業農村整備の集いを開催する機運が高まり、第1回の開催地は広島県のほぼ中央に位置する米どころで、果樹や野菜の生産も盛んな世羅町で開催されました。

広島県内の水土里ネットや市町、農業協同組合や農家の方など農業関係者100名を超える参加で、地元高校の研究発表、パネルディスカッション、記念講演が行われました。

午前の部では、広島県立世羅高等学校農業経営科の研究発表が行われました。世羅高校は全国高校駅伝で何度も優勝している強豪校として知られています。普通科と農業経営科があり農業経営科では、野菜の栽培・管理や食品製造や道の駅での販売実習などを通して地域産業の担い手となるスペシャリストとなるため学業に励んでおられ、「世羅梨ブランドを守るプロジェクト」「世羅茶復活プロジェクト」「養殖鯉の廃棄稚魚からの魚醤生産」の3つの研究について発表されました。

「世羅梨ブランドを守るプロジェクト」は、世羅町にある和梨栽培において広島県を代表する2つの農園約100haのミツバチによる花粉交配を安定的に行うことをめざし、ミツバチを世羅高校農業経営科で飼育することに成功し生産者へ引き継ぐものでした。

「世羅茶復活プロジェクト」は、以前は盛んに生産されていたお茶の栽培を復活させるもので、耕作放棄していたため自然に咲いたお茶の花を使い無農薬の世羅茶を作りました。イタリアのトリノ市で開催された「スローフード世界大会」で発表し、浴衣姿で世界の人々と交流し世羅茶をアピールしたものでした。

「養殖鯉の廃棄稚魚からの魚醤生産」は、世羅町は錦鯉の養殖が盛んですが、養殖過程で廃棄される稚魚の活用を考えたもので、錦鯉を食べる習慣がないため調味料とすることにし、塩分、乳酸菌を加えて実験を繰り返し魚醤を製造することに成功したものでした。

どの研究も耕作放棄されていたことにより咲いたお茶の花や廃棄する鯉を使うなど逆転の発想と養蜂や魚醤作りでの高い技術力に驚かされました。また、すぐにでも地場産業として活用できるものばかりで、これからの農業にとって大変心強いものでした。



午後からのパネルディスカッションではコーディネーターに広島経済大学の山本公平教授をお迎えし、パネラーには(株)グリーンファームせらの宮迫恒也代表取締役社長、(有)こめ奉行の立石弥生氏、前農林水産省中国四国農政局局長の坂井康宏氏が加わり「ほ場整備の視点からみた地域農業の展望」をテーマに議論されました。

印象に残ったものは、(株)グリーンファームせらの宮迫さんが「次の世代に引き継ぐために法人を広域化し、草刈りなど地域と協力すること、雇用者の7割が女性」と話されたこととや(有)こめ奉行の立石さんが「100haで水稻の栽培をするが、農地が点在していてそれぞれの地域で水管理のルールがバラバラで対応が難しい」と話されたことです。前農林水産省中国四国農政局局長の坂井さんから改正土地改良法において非農家の方と協力して維持管理をする准組合員のことや利水調整の規程を定め水管理のルールを明文化することなどを説明してくだり、生産者の実体験に基づいた生の声をお聞きし今後の参考になりました。

続いて「これからの農業・農村整備を考える！」と題し、全国水土里ネット会長会議顧問の進藤金日子参議院議員が講演されました。

今年は、西日本豪雨、相次ぐ台風、北海道胆振東部地震等により全国各地で甚大な被害が発生し、復旧・復興の取り組みが急務となっており、強い農林水産業づくりのためには災害に負けない農業、林業、水産業それぞれの生産基盤の強化が不可欠であることから国土強靱化に向け対策の強化に取り組んでいることを話されました。

また、日本の食料自給率について、カロリーベースでは畜産の飼料が輸入に頼っている割合が約50%あるので食料自給率を向上するため、水田を活用する施策を重点的に実施するものなど、農業を取り巻く状況を分かり易くかつ、力強く話してくださいました。



「第1回ひろしま農業農村整備の集いin世羅」に参加し、農業農村整備の重要性や今後の土地改良施設や農業用水の維持管理のあり方など水土里ネット福山の運営の参考にさせていただこうと思いました。

参加した役員は「高校の発表やパネルディスカッションを聞いて、農業の未来は明るいと思えた。」と話し、充実した研修となりました。